



# 福田正博 わがサッカー人生に 悔いなし

03年6月15日、「ミスター・レッズ」と呼ばれたJリーガーは、壇上でいま試合を終えたばかりのブーツを、静かに脱いだ。その選手生活を称揚するように、天井から伸びたワイヤーが栄光のブーツを高々と揚げていく——。ユニホームを脱ぐ、ではなく、「ブーツを脱ぐ」。ひとりのサッカー選手だけに用意された、劇的なく引退の儀式であった。福田正博、36歳。中央大学出身の、巨人・阿部慎之助とならぶプロ・スポーツ界の代表選手である。

浦和レッズの10年を振り返りながら、サッカーへの思いを、ジーコ・ジャパンへの期待と「日本人の壁」を、福田選手は熱く語った。「サッカーは結局、日本人論なんですよ」と深い言葉で。

学生記者 小野光雄(総政3年)十福田成幸(法2年)

## 引退試合

6・15埼玉スタジアム2002——観衆5万1700人(主催者発表)。福田の最後のゲット・ゴールを見るために……ファンの数からして記録的だった。

浦和レッズというチームは特別である。Jリーグを見渡してもこんなに熱気のあるサポーターはいない。埼玉スタジアムは赤一色に染め上げられた。さながら韓国で行われる日韓戦やマンチェスターユナイテッドのホームタウンの雰囲気を通想させた。

引退セレモニーで、もう一つ、他ではありえないシーンがあった。

グラウンドに赤・黒・白、レッズのチームカラーの「12」番のフラッグが敷かれている。サポーターを意味する「12」番のフラッグはわけでも神聖、ゆえに選手でもその上を歩くなど許されざる行為なのだ。サポーターは福田選手にだけそれを許した。「ぜひ歩いてほしい」と。福田はその上をゆっくりと踏みしめる

ように挨拶にのぞんだ。

「背番号の〈9〉の人文字などもそうだけど、サポーターの気持ちは十分わかっていたんで、特別な思いを持ってあの上を歩いたんです。僕とサポーターたちの間にある気持ちの深いところ、きれいだな、とかいい演出だとかいうテレビ的なものではなくてもっと気持ちの入ったものなんです。作ったものではない。そういう気持ちのつながりをサポーターから強く感じました。グッときたのは当然ですね」

引退試合は、「僕のための試合」。だから、下手な試合は見せられない。万全の体調にコンディションの調整。天候の良し悪しからスポンサーへの気遣いまで、普段とは、違うプレッシャーがあった。

スタメンには浦和にゆかりのある選手の顔が並んだ。95年、FW福田が32得点で日本人として初めて得点王になったときのホットラインを演出したMFウーベ・バイン、最下位の常連で「Jリーグのお荷物」といわれた浦和レッズを一時、優勝争



中大のミニ・フラッグが置かれたテーブル席で、福田選手は鋭い言葉をシュートのように蹴りこんできた  
=さいたま市のホテルで

いするまでに押し上げた鉄壁のDFギト・ブツバルト(94年〜97年)。他に移籍した野人・岡野雅行や同じく引退を決意した井原正巳の姿もあった。

前半14分だった。バインから福田への、現役当時と変わらぬスルーパス。福田が得意とする、スペースに出て受け取ったシュートに、あっ、

と会場がどよめく。「昔の感覚をとり戻せたような気がした。動いて目が合っただけなんですけど、自分のイメージしたとおりのタイムリングで出てくる。言葉で何かを言ったわけじゃなくて。感覚というか、言葉以上にもっと深いところでの信頼で結びついていたんですね。それを強く感じる一瞬なんです。何年たっても

変わらないことだと思いませんね」。惜しくもゴールはならなかった。

そして後半35分、「ゲット・ゴール」の大声援のなか、福田はヘディングで最後のゴールを決めた。試合を楽しんで、最後までとは思わな

かったという。「昔やった選手と一緒にできる喜びも持ちながら、これからはもうずっとこういう中でできるみたいな感覚だった」。最後まで意識したのは、試合が終わってからだった。この日はちょうど父の日で、幼稚園に通う長女・萌香ちゃん(4つ)の父親参観の日でもあった。参加できなかつた代わりに、父はゴールで家族一緒にスタンド観戦の愛娘に応えた。

### もとは野球少年

サッカーの申し子も、もとは野球少年だった、らしい。横浜で小学校5年まで野球をやっていた。まだサッカーはプロもない時代でマイナーなスポーツだった。幼い夢は野球選手になること。

家が引っ越したことで転機が訪れる。新しい学校の担任の先生がサッカーを教えていた。運動神経のよかった福田は当然、誘われた。はじめは嫌々だったという。しかし、足の速かった福田は点を取ることに喜びを感じながら、サッカーというス

ポーツにのめりこむのに1カ月もかからなかった。

### 中大時代は……不完全燃焼

85年から4年間の中大時代の話になると、すこし声のトーンが落ちる。「サッカー部に関して言えば、よくなかつたですよ」と。

伝統があるとはいえ、当時の中大サッカー部は、実力的に関東1部リーグからなんとか落ちないというレベルだった。新興勢力として筑波国士館、順天堂などの体育系の大学が頭角を現していた時代でもある。それまで強いとされていた中央、早稲田、慶応は力を落としていた。「中大は1部に残らなきやという伝統だけでやっていたので優勝はほとんどなかつた。2部に落ちなければという感覚だった」と福田も認める。

とはいえ、1年次、秋の関東リーグで新人賞王、2年次には日本B代表、4年次アジア杯予選日本B代表に選出——そんな個人成績を残しているのだが、「サッカーも遊びも中途半端でした。とくに3、4年の



ときは」と表情が曇った。

4年次はキャプテン。チームをまとめるのに骨を折ったという。

日本はバブルの時代。大学生には時間がある。遊びにハマってしまっ人もいた。「みんなの目標がひとつじゃなかった。今みたいにプロというのがある目標に向かったんだろ」うけど。4年にもなると就職とか下の学年にも教えたり、まとめるのは難しかった。自分のことよりもほか

の人のことに気を取られて自分のことがおろそかになってしまった」

お金がなくてバイトもした。食費を削ることもしばしば。

「学生はやはりお金がない。スポーツやるには向いていない(笑)」と声を大にして言ったあと、真顔で日本のシステム上の弊害について話した。

日本の教育システムは6・3・3制である。これがサッカーに関しては問題だという。小学校の時期はしっかりと指導者がいる。逆に中学校はサッカーを専門にする人はほとんどいない。そして受験での半年のブランク。高校の指導者はいい。また、大学では環境がサッカーに専念できない。つまり、

「ひょうたん型」

なのだ。だから、中学と大学の時期をどう乗り越えるかが重要だ、と。

「大切な時期に半年くらい何もしない時期があったり。体を作らなきゃいけない時期に、例えば麻雀、パチンコでお金を使ってしまったら、サッカーという点ではよくないけど、

金がない中でなんとかしようっていうのはそれはそれで楽しかったですよ」

## Jリーグ誕生——プロへの道

89年中大経済学部を卒業後、三菱重工入り。その年、いきなり福田はチームの得点王となる。50年創立(中日本重工)の歴史をもつ三菱重工は、福田が入るまでに天皇杯優勝4回のアマチュアではトップレベルのチームだった。

徐々にだがプロ化は進み、日産(現F・マリノス)、読売(現ヴェルディ)、ヤマハ(現ジュビロ)はすでにプロ化を一部の選手に認めていた。しかし、福田はアマチュアを貫くようなチームを選んだ。日本でのプロという職業の不安定感やある種の抵抗感。

「僕らが就職したときは年功序列で終身雇用という時代だったから、大きな会社に入れば一生面倒を見てもらえるという社会。逆にプロという不安定な職業を選ぶということはものすごく決断のいることだった」だが、時代の流れは福田をアマ

チュアのままにしておくことを許さなかった。

91年7月——Jリーグの発足が決まる。

93年5月——華やかに、Jリーグが開幕した。

「会社に入ったといっても午前中はデスクで働いて午後は練習、といういわゆる実業団だった。中途半端といえど中途半端でした。会社においても特別な仕事を与えられるわけでもないし、そういう自分が無駄かかっていう気もした。時代の流れからしてもサッカーにかけてみようという決断したんです。プロになるからといって特別な心構えなんか全然なくて、とにかく、できる限りサッカーを長い間続けられればいいなと思ってた」

## レッズ10年の光と悔し涙

95年得点王、ベストイレブン、11月にはAFC(アジアサッカー連盟)月間最優秀選手に。93年W杯最優秀選手「ドーハの悲劇」の日本代表と95年には対ブラジル戦で日本代表と

して初めてゴール決めるなど、国際Aマッチ45試合で9得点と個人としては申し分ない成績を収めた。しかしチームとしては満足のいく成績は残せなかった。99年の11月27日には決して忘れることのできない、最終節にしてJ2落ちという屈辱も味わった。

その試合で福田は延長戦でVゴールを決めた。しかし、笑顔はなかった。

「世界一悲しいゴール」

といわれ、本人も「あんなにむなししいゴールはなかった」と男泣きした。いま語る。「これほど多くのサポーターがいながら落ちるとは、だれしも思っていないかった。監督の起用方法に不満がある中でJ2に落ちてしまった」

ケガも多かった。93、94年、96年といつもケガと隣り合わせだった。そして2003年、引退を決意する。オフト監督とは何度も話し合ったという。

「オフトとの出会いはドーハの若いころと最後の年。その両方を知っている彼を僕は信頼していましたか

ら、彼が僕のことを客観的にどう判断しているかは興味ありましたね。彼に言われて、ああそういう時期が来たんだ、と思ったのは事実です。あとは自分で判断して辞められたというのが最終的にはよかったと思いますね」

浦和レッズで福田があげた得点は通算91得点（216試合出場・J1のみ）。浦和で過去50得点以上をあげた選手はほかにいない。サポーターが与えた「ミスター・レッズ」の称号は不滅なのである。

### 同僚あるいはライバル

福田と同時代に活躍した同じポジションの選手に中山雅史（ジュビロ磐田）、三浦和良（ヴァイセル神戸）がいる。カズさんと食事したりは？

との問いに「それはないですね。やはり同じ年齢で同じポジションというのは難しい」ときっぱりと答えた。

——ライバル意識、でしょうか？

「うーん、お互い意識するなっっていうのも意識してしまいますね。なかなか同等で話すことはできない

ですね。僕らの世代っていうのはどちらかというとな下になったほうが居心地がいいんです。仲が悪いとかではなくてね。年齢が上下だったりすればそこしつかりとした関係が生まれるんですよ。同じ年齢だと力的に上下になれないじゃないですか。

2人で意気投合して仲よく話をするという感じにはならないですね」

FWというポジション。点を奪わなければ認められない。静かなる闘争心が響いた。

——小野伸二選手（浦和↓オランダ・フェイエノールト）とは？

「伸二とは普通に食事したりとか

はありますね。ただ僕は夜飲みに行ったりはあまりしないので、僕がひっぱり回してもね。年齢的にもちよつと違いますからね」

### ジーコ・ジャパンと「日本問題」

すでにテレビなどにも解説者として登場している。歯切れのよさ、それに現役経験を生かした的確な指摘と分析力は折り紙付きである。

6月のコンフェデ杯でジーコ監督率いる日本代表は1次リーグで敗退した。そのジーコ・ジャパンをどうみるか。

「この時期まではこういうものを、

という積み上げみたいなものがないので、このままチームが成熟していくのかという不安はある。ジーコの言っていること（自由・創造性重視）はわかるが、それへの取り組みが本当に日本人の長所や短所を分かっただうえ



でやっているかどうかだと思っ  
て。日本人のいいところを最大限に  
生かすのが日本人のスタイルだと思  
いますから」

続ける。

「大きな国際試合で、なんでFW  
が点を取れないんだって新聞でも書  
かれるんだけど、それは日本が抱え  
ている問題なんですよ。逆に言えば、  
日本人の持っている良さかもしれない。  
FWの選手が他の選手のために  
動いたりするわけですよ。海外の場  
合は個人主義ですから、自分がいか  
に結果を出すかを考えますけど、日  
本チームは逆に協調的な特性を最大  
限に生かしたスタイルでやっていっ  
たほうがいいと僕は思うんですけど  
ね」

サッカーは国民性のスポーツであ  
り、結局は日本の社会が抱える問題  
に突き当たる、と福田は話すのだ。

「サッカーは、宗教・文化を含め  
た国民性が出てしまうスポーツなん  
です。日本人は、協調性はものすこ  
く高い。一方で、自分で考えて発信  
していくということ、決断していく

という勇氣はないんですね」

原因のひとつに、例えば、小さい  
ときに失敗すると怒られる、という  
通弊がある。

「親にとつていい子というのは親  
のいうことを聞く子なんです。そ  
れが人間として優れているかとい  
うとまた別問題です。指導者にとつ  
ても扱いやすい選手がいい選手、とな  
りがち。本当に技術や能力が備わっ  
た、いい選手である例は少ない。トッ  
プにいくと想像力、創造性のある選  
手の評価がまた違う。根本的に日本  
の教育にまで踏みこんでいかないと  
本当に解決はしないのかもしれない  
んね。平均点を取ることが日本では  
いいとなるが、1つだけ何か飛び抜  
けた持っている選手のほうがスポー  
ツに向いている。そういう選  
手が育ちにくい環境ですからね。そ  
こから変えなければ」

対比して、前任者のトルシエ采配。

「トルシエはシステムを重視しま  
した。日本人は順応力があり、労を  
惜しまず努力もしますから、システ  
ムのなやりかたはひとつの方法とし

て賛成ですが、あれだけでは世界の  
さらに上にいくのは厳しい」と。

日本代表のレベルが上がってきた  
のは事実である。98年のフランスの  
W杯初出場。01年コンフェデ杯準優勝。  
02年日韓W杯ではベスト16。特に  
ここ10年間の成長が著しい。ここか  
ら「あとちょっとの差」が立ちはだ  
かる。ブラジル、フランス、アルゼ  
ンチン、世界の強豪と肩を並べるに  
はどうすればいいのか。

「日本人の生き方や性格が関係し  
てくるんです。短期間では埋まらな  
いと思います。こどもたちの育成の  
システムを変えていく必要がある。  
10年後、20年後ということを見据え  
ないと厳しいですね」  
長い道のりである。

Jリーグについても「Jリーグの  
レベルは上がっていない」と、忌憚  
のない発言が返ってきた。

「はつきりいって（レベルが上  
がったのは）ジュビロだけなんです  
よ。あとは勝つためにサッカーをし  
ているだけなんです。サッカーの  
質はそれほど変わっていない。ジュ

ビロみたいなチームがあと4、5  
チーム出てくれば本当にレベルは上  
がったといえますけどね。その意味  
ではジェフなんかはひとつのいい成  
功例だと思います」

ジェフ市原はファーストステージ  
13節（7月23日現在）を終えて単独  
首位。残り2節に初優勝をかけるま  
でに。3位に終わったがチーム作り  
に3年をかけて新監督オシムのもと  
着実に成果を出してきている。大切  
なのはクラブがチーム運営をどのよ  
うに考えているかだと、言った。

10年間プレイし続けてきたからこ  
そ、誰よりもそのことが実感できる  
のだろう。

### 単純ゆえに難しいサッカーの深さ

発言を聞きながら、「サッカーは  
最も哲学的なスポーツである」とい  
う言葉を思い出していた。例えば『哲  
学的フットボール』（マーク・ベリ  
マン著／日経BP社）という愉快  
な本には、「道徳と義務に関して私  
が知り得たすべては、つまるところ  
サッカーに負っているというほかな



い」という『異邦人』アルベール・カミュの言葉などが引用されている。

そんな無駄話をしたら、

「そうですね。ただ単純なスポーツなんです。難しく考えちゃいけない。だが、いかにカンタンに考えるかが難しい」

もうすでに、指導者の顔でもある。こどもたちにしつかりと指導をすることがこれからの夢だという。引退後、浦和近郊の少年サッカー教室の指導にあたっては、「サッカー

の楽しさを伝えたい。自分がプレイヤーとして感じていた日本人としての弱い部分、判断する力も克服させたい」

やがては「監督に」の夢。

「先のことになりませんが、監督になるためのライセンスをとりたいと思います。ただ国内でしかやっていない日本人監督が国際試合を率いるか、となると、監督自身が気後れして勝負にならない。監督の心理状態が選手に影響を与えるんですよ。

小野伸二や中田英寿なんかの世代が監督になったときに初めて世界の監督と戦えるでしょうね」

国際経験が言わせる言葉だろう。

### 引退試合の栄光忘れず

端正で浅黒い顔。じつとこちらの目を見て話す。ときにどきまぎするほどである。

「サッカーではアイコンタクトがあれば言葉がなくても相手の考えていることがだいたいわかるけど、今の子供たちは目を見ることさえできない子もいる。目を伏せてしまう人

もいるよね。怖いことだと思うよね。僕はよく相手の目を見て話すようにしてるでしょ。言葉の足りない部分を目で訴えるんだ」

と笑ってから、こんな若者論。「日本ってコミュニケーションをとらずに生活できるようになったでしょ。回転寿司、たばこも自動販売機で買えるし、本当はたばこ屋さんでおばちゃんから買うのが一番だと思ってるよね。そういうのもわずらわしくなっている。コミュニケーションをとることが下手だし、苦手になってくる。この先どうなるのかという気がするよね」と。

振り返って言う。

「華々しい栄光は手にすることができなかつたけれど、その中で自分がいつもベストを尽くすことはできた。すべてのことに対して気持ちをもつて精一杯やるっていうこと。サッカーの場合、うまいだけでは人を感動させることはできない。演技ではないから。気持ちがあるから伝わるんです。本当に同じところで10年間サッカーをやれてよかった。時

にはぶつかることや行き違いはありましたけど、そういうことを経ながらも多くの仲間が得ることができました。それが僕の生き方だと思っんですね」

——わが人生に悔いなし、と。

「そうですね。引退試合にあればどの人がきてくれた。それが自分やってきたことの答えであり評価だとすれば、光栄ですね。期待に応えられるように、これからも、やっていくつもりです」

力ぶよく語った。

×

×

浦和レッズの選手たちがよく使うホテルで、インタビューは1時間半にも及んだ。学生記者はうずうずしい。ふたりして色紙にサインをお願いし、熱狂的レッズファンを自任する福田は「同姓のよしみ」で、持参のサポーター・ユニホームにも。

イヤな顔ひとつせず（であったかどうか……）、「ミスター・レッズ」は「君たちもがんばって」と声をかけて、愛車のベンツで次の予定会場に向かった。